

『夜の寢覚』における髪表現

——『源氏物語』宇治十帖の引用を糸口に——

赤 迫 照 子

はじめに

『夜の寢覚』の主人公寢覚の女君は長く豊かで美しい髪を持ち主である。その髪についての描写は、第一部に多い。物語が女君を髪の美しい女性として描き出そうとする姿勢は、例えば次にあげる病床の女君（実は男君の子を妊娠している）を次兄宰相中将が見舞う場面からもうかがえる。

「（女君心）御几帳押しやりて見たまへれば、桜なる御衣どもの上に、蘇芳（蘇州布）の濃く薄き重ねて、いとつややかなる御袞を押しやりて、襪を作り臥せたらむやうに、御衣の限り、身もなくて見えたるに、うちやられたる御髪の襷は ふさやかにこちたくて、顔を引き入れて臥したまへるがいみじくあはれげなるに、…」

（巻一・一一四）

傍線部は「源氏物語」宇治十帖、臨終間際の宇治の大君を薫が見

つめる場面を引いている。^②

「〔2〕腕などいまと細うなりて、影のやうに弱げなるものから、色あひも変らず、白ううつくしげになよなよとして、白き御衣どものなよびかなるに、袞を押しやりて、中に身もなき襪を臥せたらむこちして、御髪はいとこちたうもあらぬほどにうちやられたる、枕より落ちたる際の、つやつやとめでたうをかしげなるも、いかになりたまひなむとするぞと、あるべきものにもあらざめりと見るが、惜しきことたぐひなし。（総角七・一〇七）

宇治の大君の髪は「うちやられたる」ものでありながら「つやつや」と輝きを放っている。見られるのを拒み続けた大君の瀕死の身体と、髪とのアンバランスさが薫を惑乱させ、大君への執着は高められていく。

「寢覚」は傍線部の如く女君の身体に宇治の大君の衰弱した身体を重ね合わせることで、ヒロインが死んでしまうかのように装い、

場面に危機感を煽ろうとしたのであろうか。ただ、髪の毛の量感には波線部のように「こちたうもあらぬほど」から「ふさやかにこちたくて」に変えられている。

三田村雅子氏は、後期物語は「宇津保物語」「落窪物語」といった前期物語と同じく「原則として女君の髪の毛の量と質の完璧性・理想性を繰り返す」ばかりであり、そのありようからは「物語の女主人公の髪とは、そのような理想性を具備したものでなければならぬ」という確固とした信念³がうかがえると指摘された。基本的に後期物語では、長く豊かで艶やかな髪という典型的な王朝の美意識に反するようなことはない。そのためヴァリエーション豊かで、女性の生^{なま}のありようを照り返す媒体にまで昇華された「源氏」の髪に比べ、後期物語に描かれる髪は単調で退屈と評される⁴。

「1」の傍線部も、そのような「寝覚」の美意識によるのであろうか。「寝覚」は宇治の大君の髪をよしとせず、たつぷりとした髪を女君に与えた。精神的ショックから数ヶ月間寝込み、その上子を宿した身でありながら、たいして髪が衰えていないのは、不自然ではあるが。

例にあげたように、「寝覚」第一部において女君は精神的・肉体的衰弱が甚だしいのに髪は衰えておらず、乱れてもいないことが「源氏」宇治十帖の表現を用いながら述べられている。これは確かに女君の完璧な美しさを強調し、絶対的なヒロイン性を付与してい

くためなのではあろう。しかしながら、髪の毛の描写および「2」の波線部のようなアレンジを全て「寝覚」の美意識に収斂させてしまつては大切なことを見落としてしまつてはならないだろうか。すなわち、作者の好みで「源氏」の印象的な場面が選ばれ「寝覚」にはめ込まれただけなのではなく、読者が「源氏」を想起するのを見越して、それによつて生じる効果を意図したようにうかがえるのである。本稿では「源氏」の髪にまつわる引用を糸口に、「寝覚」の髪の毛の表現のありかたについて考察したい。

一、大君の髪の毛の描写

「寝覚」において大君・女君の美質・性格等は相対的に描き分けがされているのに、姉妹の髪は直接的に比べられてはいない。近くで姉妹を見ているはずの父や兄達、そして男君によつて比較されることはないのである。ただし唯一大君の髪が描かれた新年の場面において、姉妹の髪の毛の差異が遠回しに示されているように見受けられる。

「3」①紅^{あか}の御衣八つばかり、かげ見ゆばかりなるうへに、桜の五重なる御衣、萌葱の小桂、ものよりことに気高く、あてに、きよげに、御髪、色なるかたによりて、こまごまとさはらかにきよらにて、桂の裾にゆるゆるとおはす。

(巻一・八一)

②紅^{あか}梅の八つばかり、萌葱の小桂、袖口、裾の棲まで、たをたをとなまめかしく着なしたまひて、はなばなとにほひみちたり

し御かたちの姿はるまで、面瘦せたまひにたれば、あてに、心
苦しげなるを、大臣も、兄の殿ばらも、「ありがたくあはれな
り」と、うちまもり比べておはす。
(巻一・八一―一二)

「新編日本古典文学全集」が「大君方が新春らしく衣装や調度の
色を揃えて装っているのに、中の君方は女房や童の装束が、春の色
ではあるが不揃いであるなど、対照的に描かれている」と注するよ
うに、ここでは姉妹の差異が鮮明になっている。大君方の女房・調
度は紅梅と萌葱に統一され、男君の心を掴むためであろう、大君だ
けが桜の衣を纏って際だっている。片や女君方は不統一で、女君そ
の人も紅梅と萌葱という大君方の女房のような衣装を着ていた。一
見、立派な夫を迎え幸せな姉と病の妹というように、両者の明暗が
はっきりしているようだが、実は男君の心は女君にある。以前拙稿
で指摘したが、いくら大君が男君の最愛の妻でありたいと願ひ、桜
の衣を着て男君の気をひこうとしても、男君が桜のイメージを重ね
見るのは「我がごとや花のあたりにうぐひすの声も涙も忍びわびぬ
る」(一一〇)と詠じたように、女君の方であった。本人の意思と
は無関係に、まるで姉から桜の衣を奪い取ったかの如く女君は桜の
イメージを纏わされているのである。

このような男君のとり違えは、「源氏」若菜上巻で紫の上ではな
く女三宮に桜のイメージを重ねてしまった柏木のそれに、そして一
方的に桜のイメージを負わされた女君は女三宮に通う。「1」の桜の

衣に圧倒される女君の姿は、男君からの激しい恋情に押し潰されそ
うな姿そのものといえよう。「寢覚」は桜に彩られた柏木と女三宮
の禁断の恋のイメージを取り込みつつ、前掲「我がごとや…」歌や
「1」まで読者が読み進めた後に、桜は姉の夫を奪うという女君の宿
命の象徴だったのかと合点がいくよう仕組んでいるのである。こ
の、後々になって「3」が皮肉なかたちで姉妹の明暗が強調された場
面として浮かび上がっていくという表現構造を確認しておきたい。

「3」において大君は髪を「色なり」「さはらかなり」と形容され
ているが、「寢覚」の現存部分をみる限り、同様の表現はこの大君
の例しかない。やはり「色なり」「さはらかなり」と髪を形容され
た人物としては、「源氏」椎本卷末、薫の垣間見の場面における宇
治の大君の例がある。しかも姉妹の差異を強調した場面である点も
一致する。

「4」①髪、(中ノカ) 桂にすこし足らぬほどならむと見えて、末まで塵のまよ
ひなく、つやつやとこちたうつくしげなり。

(椎本六・三五〇)

②髪、さはらかなるほどに落ちたるなるべし。末すこし細り
て、色なりとかいふめる、翡翠だちていとをかしげに、糸をよ
りかけたるやうなり。
(同三五二)

薫は①中の君の理想的な髪も同時に目にしながらも、②「さはら
か」な、量が少ない髪の大君の方に惹かれていた。河添房江氏が

「規範的な美の基準から逸脱し、むしろそれを解体しかねない様相にエロスを感じるのが、『源氏物語』の髪をめぐる言説の本質ではなかったか」と述べられたように、『源氏』では「さはらか」な髪は貧弱で否定されるべきといった、単純な図式をめぐらせてはいないのである。

では「寢覚」の大君の髪の「色なり」「さはらかなり」という形容から何が看取されるのだろうか。これは類似や参考といったレベルではなく、宇治の大君の瘦せた髪を読者に想起させるための仕掛けといつてよいのではないか。宇治十帖の表現によつて宇治の大君の、妹に劣つた、艶はあるが量の少ない髪の姉というイメージを取り込んでいるとみたいのである。

「きよら」と評価され、父や兄達も「これこそは、限りなき人の御様なれ」（八一）と言っているけれども、場面の設定からいって単に「源氏」に倣つて「さはらか」な髪の魅力を発見しているとは片づけられまい。大君の髪はさりげなく、すでに「つやつやと隙なく凝り合ひて」「丈に五六尺ばかり余りたまへる末の、五重扇を広げたらむやうに、きよらに多く凝り合ひて、類なくめでたし」（五九）との描写がある女君の髪と対照されているとみるべきであろう。物語は手放して大君の髪を賞賛してはいない。大君は確かに美しいけれど、女君には敵わないように仕立てるため、『源氏』の表現を利用したと考えられるのである。さらにいえば、大君と宇治の

大君の髪が重なり、椎本巻が思い出された読者にすれば、質・量・長さいずれも申し分ない、「人」のレベルをはるかに越えた女君にも、自ずと宇治の中の君のイメージがかぶさつていくのではないか。女君の髪は一言も描かれずとも、宇治十帖の引用によつて姉同士のイメージが重なれば、結果的に、「4」①のような宇治の中の君の髪によそえられてもこよう。

宇治の大君は中の君よりも貧弱な髪をくまなく見られてしまったものの、薫を惹きつけた。大君の場合、姿も髪も全て準備を調へ男君を迎えたのに、愛されない。量感を欠いた「さはらか」な髪は桜の衣と同様、大君の高揚の空虚を暴きたてるかのようなのである。この後の展開を念頭におけば、大君は一見この上なく美しいよう描かなければならないが、実は女君程ではないように、女君は本来ならば最高の美女なのだけれども、ここでは大君よりは目立たないように、ひかえめに抑えて——「寢覚」はヒロイン性を全て女君へと戻していくため、『源氏』に頼つて姉妹の描き分けに微妙な工夫を凝らしたようである。

二、女君の髪と浮舟の髪

主人公女君の髪が初めて描かれるのは、対の君から男君の子を妊娠していると告げられた場面である。対の君は女君の髪を「掻き下し」て手入れしながら、真実をすべて打ち明けた。大きなショック

を受け、泣き続ける女君の姿は「限りなくをかしげ」で、髪も美しい。

〔5〕①御髪は、頂より末までいざさか俊れたる筋なく、つやつやと隙なく凝り合ひて、長さはちちたくもあらず、丈に五六尺ばかり余りたまへる末の、五重扇を広げたらむやうに、きよらに多く凝り合ひて、類なくめでたし。(巻一・五九)

②「あなないみじ。すぐれたまへる人の様かな。ざりとて、などてか、いたづらに、かかる人のなり果てたまふやうのあらむ。仮にても、かかる事の紛れありて、いとかくものを思はせてたまつる、我がしたる過ちならねど、妬う、口惜しく、悲しく」思ひあまりて…。(巻一・五九)

③「なかにもこの姫君は、御よそめいと警策なり。女と申しながらも、前の世のことにより生まれもしたまへると見ゆるものを、かかる不便のことのおはすらむ、むなしくいたづらに捨てられぬものなり」(巻一・六一)

④「骸をだに残さず、この世になくなりなばや」(同)

②女君の髪的美に感じ入った対の君は、女君を虚しく朽ち果てさせはしまい、なんとか事態への対処に努めようと決意し、法性寺の僧都に相談する。③僧都は女君の美の比類なさに前世の功德を思い合わせ、無事を祈るが、④女君は「骸」も残さず死んでしまいたいと塞ぎ込み、弱っていくばかりであった。

〔5〕①は次にあげる〔6〕①「源氏」手習巻、浮舟の尼削ぎの表現を引いている。その後も続いて〔5〕②は〔6〕②浮舟を見た中将の心中に、〔5〕③は〔6〕③横川の僧都が浮舟の美しさに前世の功德を思う条、〔5〕④は〔6〕④入水前に匂宮へ送った浮舟の詠歌と、集中的に浮舟物語との重なりをみせている。

〔6〕①薄鈍色の綾、中に萱草など、澄みたる色を着て、いとさざやかに、様体をかしく、今めきたる容貌に、髪は五重の扇を広げたるやうに、こちたき末つきなり。(手習八・三三九)

②いとかくは思はずこそありしか、いみじく思ふさまなりける人をと、我がしたらむ過ちのやうに、惜しくくやくしく悲しければ、つつみもあへず、…(同三三九―三四〇)

③「げにいと警策なりける人の御ようめいかな。功德の報いにこそ、かかる容貌にも生ひ出でたまひけめ、いかなる違ひにて、かくそこなはれたまひける。…」(同二八六)

④骸をだに憂き世の中にとどめずは

いづこをはかと君もうらみむ(浮舟八・九四)

周囲の人々の顔色を伺いながら生きてきた浮舟は、髪を削ぎ落としてやつと心の安寧を手に入れる。良き夫に恵まれるようにという母や横川の妹尼君達の期待に背き、女として生きることを放棄し出家という道を選択した時、浮舟の短く削がれた髪は生き生きとしていた。浮舟にとって長い髪は重圧以外の何でもなかったのである。

池田和臣氏が指摘された通り a 「五重の扇を広げたらむやうに」も「浮舟を喚起する連続的引用表現」ではあるが、女君と浮舟では髪の長さが違う。「源氏」では短く削がれた髪の、鮮やかな切り口に焦点が当てられているのに対し、「寢覚」では「頂」から「丈に五六尺ばかり」余った「末」まで、全体がなぞるように描き出され、「凝り合ひて」の反復によって髪の量が強調されている。ここでは対の君の視線を通じて、あくまで女君の長く豊かな髪が確認されているのである。

髪が女性性の象徴であることを思う時、「5」①は殊の外重要な場面に見えてくる。女君にしてみれば、男性と契り、しかも妊娠してしまったことは到底受け容れ難い現実には違いない。天人に琵琶を伝授された我こそは選ばれし者という女君の誇り—永井和子氏がいわれたような「かくや姫感覚」¹¹は、彼女の価値を誤認した男君によって破壊されてしまった。夢見ることが許される、無垢で純粋な少女の時代は、突然終わったのである。「5」①は少女から女への強制的な移行についていけず、困惑するばかりの女君の女の性が、対の君によって発見されている場面なのである。

髪を切り女を捨てた浮舟と、女の性に対峙しなければならぬ女君。作者は「五重の扇」という表現から、すつきりとした浮舟の尼削ぎを読者に想起させ、逆に女君の髪の重さが生々しくたちのぼってくるのを期待したのではないだろうか。そもそも対の君が髪の手

入れをしつつ女君に真相を告白するという設定からして、女君の髪に焦点が合わされようとしているのは明らかである。浮舟は髪とともに女の性を放棄したが、女君は髪をひきずって生きていかねばならない。女君と浮舟は単純に重ね合わされてはいないのである。浮舟の尼削ぎを逆転させるかたちで利用し、女君の女の性を具体的に表現する—これを「寢覚」の工夫とみたい。

このように髪や容貌の卓越した美が確認された上で、「5」④女君の悲嘆「骸をだに：」へと移っていく。もちろん女君が厭う「骸」とは、姉の夫の子を宿してしまった我が身を指している。しかし「骸をだに：」は、そのような女君の認識など越え、身体や髪の写真と共鳴しているのではないか。

出産に至るまで、女君が身体の変化に戸惑い、良心の呵責に苛まれる条が何度もあらわれる。彼女はただ「せむかたなくおほし呆れ」(七八)るばかりで、「見咎めたまふ人もや」と、我が心の鬼に恐ろしくわりなければ、伏目にのみおほされて、人々の見たてまつりたまふをいと苦しくおほさる(八二)と身体を見られて妊娠が明らかになるのに怯え、罪悪感に泣き沈む。

「7」つねのこと、今日は物ごとにあらたまる心地して、我が身もめぐらししくおほえて、¹²「かやうなるほどは、琴掻き合はせ、何となく思ふことなかりし、いつなりけむ。片時も立ち離れたまふ

は心細くおぼえし殿にも、中納言（中納言）の上にも、見えたてまつるは、いと苦しくおぼえなりにたり。親しく使ひ馴れし人々にも、かげ恥づかしくて、いかで、人の見ざらむ巖のなかにもと、思ひなりにたる」我が身ながら我が身とはおぼえぬに、人々の変はらぬさまに並み居たるを見渡したまふにも、もののみ悲しくおぼさるれば、：

（巻一・八二—三三）

全てが改まる新年。でも私はどうなのか、家族の目を憚るべき「我が身」とは何なのか。女君は「かくや姫感覚」を壊され、混乱している。女君はもの思いのなかつた昔を思い出さずばかりで、隠蔽すべき、罪深いこの身体が自分のものという実感がもてず、違和感を抱いている。

女君の心のありようと身体のずれは前掲「1」において、より鮮明である。次兄宰相中将にとらえられた髪は、女君自身を圧倒せんばかりの存在感であった。髪はたつぷりであるのに、女君その人は不在なのである。髪に圧倒されるといふのは、女君の小さな身体を表現してはいるが、桜の衣と同じく、男君の激しい恋情に応えられぬ女君の窮状を表していよう。事情を知り女君に同情する宰相中将のまなざしに、女君の髪は男君を魅了してやまないものとしてとらえられているのである。女君にしてみれば己の女の性にどう向き合えばよいか解らないし、解りたくもない。髪は現実から目を背けようとすると女君にとって、重圧でしかないのである。

宰相中将の見舞いに心苦しさを感じつつ、起きあがる女君の姿は、次のように描かれている。

「8」夜昼、涙のみ流るるよりほかのつくりひなくて、月ごろになりぬれど、つゆばかりも衰へなく、御顔はいとどにほひわたりて、うち面瘦せたまひつるうつくしさは、似るものぞなきや。いささかひきもつくりはぬ額髪は、ことさらにひねりかけたらむやうにこぼれかかりて、いとつつましげに、たゆく見なしたまひつるまみ、面つきなど、言へばおろかなり。

（巻一・一一五）

ずつと繕われていないのに、涙で濡れた額髪さえもわざとしたように彼女を美しく引き立たせてしまふ。男君の恋情や妊娠という重圧に苦しみ、鬱々とする女君の心のありようから離れて、髪はただ美しくあり続ける。

このように女君と髪乖離が繰り返され、再び巻一末尾に「いかで骸をだにとどめず、なくなりなむ」（巻一・一二〇）という女君の悲痛な叫びが表れている。妊娠の告知・巻の終末部という巻一の大切な箇所（箇所）に置かれた、「骸」もろともに死んでしまいたいという願いは何を炙り出しているのだろうか。

宇治十帖には「骸（殻）」「骸をだに」という表現が頻出する。例えば次のようである。

〔9〕^{〔宇治大君ノ薫君〕}「変りたまへるところもなく、うつくしげにてうち臥したまへ

るを、かくながら、虫の鼓のやうにても見るわざならましかば、
と思ひまどはる。
(総角七・一一〇)

②「中納言殿の、骸をだに」とどめて見たてまつるものならまし
かばと、朝夕に恋ひきこえたまふるに…」

(早蕨七・一二七)

③「むなしき骸をだに見たてまつらぬが、かひなく悲しくもあ
るかな」
(蜻蛉八・一〇五)

④「おはしましにけむ方を尋ねて、骸をだにはかばかしくをさ
めむ」
(同一一〇)

⑤「骸をだに尋ねず、あさましくてもやみぬるかな」
(同一三五)

①は亡くなった宇治の大君を「虫の鼓」になぞらえた薫の心中、②
は、宇治の中の君の女房達が語った故宇治の大君の「骸」への薫の
執着、③④は乳母や母君の、浮舟の「骸」もないまま葬儀を行わな
ければならない哀しみ、⑤も葬儀に際して、浮舟の「骸」のないこ
とに対する薫の思いである。池田和臣氏は「6」④「骸をだに…」は
匂宮への贈歌という枠に止まらず、「9」のような、宇治十帖に散見
する「骸」にまつわる表現と「文脈の表層をこえ」て響き合い、
「男の執着と自らの迷いをおのが肉体の抹殺によって絶とうとす
る、救いを希求する女の魂、かかる主題的想像力をこめられた歌」

だとされた。^{〔9〕}宇治の大君の「骸」によく似ていたばかりに、形代と

して薫に求められた浮舟。自らの「骸」に弄ばれ他者の欲望のまま
に自分をあわせなければならず、苦しんだからこそ、「6」④の歌が
導きだされ、入水(＝死)という展開が用意されたのである。自ら
の手で自らの「骸」を殺すしか、逃げようがなかった。このような
浮舟の、身体からの疎外という要素を持ち込んだのが「骸をだに残
さず、この世になくなりなばや」「いかで骸をだにとどめず、なく
なりなむ」ということばなのである。「寢覚」は「源氏」の引用に
よって、心のありようと身体のずれに振り回される女君の姿を照ら
し出そうとしていよう。^{〔10〕}女君の髪に美に関する描写の集積は、単に
病にも色褪せないヒロインとしての超越性を保証するだけではな
い。浮舟物語の表現を取り込みながら、女君の少女から女への変容
の過程を紡いでいるのである。

三、女君の髪と男君の執着

対の君や宰相中将の尽力によって、女君は石山で出産する。この
時、女君の髪は初めて男君の視線にとらえられた。

〔10〕いと小さくおはする人の、腹いと高く、こちたげにて、白き御
衣のなよなよとあるを引き掛けて、胸のほどにぞ押しあてた
る。いと身もなく、衣がちに、あはれなげなる心苦しさに、な
にのいたはりもなく御髪は引き結びてうちやられたる、いささ

か乱れまよふ心地なく、つやつやとめでたく、裾は扇を広げたらむやうにて臥したまひつるが、あたらしく惜しげなるさまは、鬼神、武士といふとも、涙落とさぬはあるまじきを、まいて、夢のやうにてただ一目ほのめき寄りて、月ごろを経て、限りなく思ひしめて恋ひおほす仲の、かかる折をしも見たてまつりたまふ御心地、なのめならむやは。(巻一・一三二)

九条での垣間見の際、対の君・但馬守の三君の髪は觀察されていたのに、一段奥まった所にいたせいであるうか、女君の髪はとらえられていなかった。以後の接触においても髪の写真はない。これまで短い蓬瀬しかもてなかつた男君が、今初めて女君を思う存分眺めているのである。

ここでも波線部のように大きな腹部に圧倒され、女君本人は「いと身もなく、衣がち」と不在である。髪もやはり手入れされていないにも関わらず、見事であつた。女君の身体は男君の前に投げ出されているのに、女君その人はいない。否、女君の心を知ろうとしない男君には、女君が見えないのかもしれない。男君はただひたすら女君の美に感動し、何とかして彼女の命を留めたいと涙にむせぶばかりであつた。

ほとんど意識のない女君の髪を男君が見つめるこの場面は「源氏」葵の上の出産場面や紫の上の死の場面、冒頭にもあげた宇治の大君の臨終間際の場面を髣髴とさせる。

〔11〕①白き御衣に、色あひいとはなやかにて、御髪のいと長うちたきを、引き結びてうち添へたるも、かうてこそらうたげになまめきたるかた添ひてをかしかりけれと見ゆ。(葵一・八五)

②御髪の乱れたる筋もなく、はらはらとかかれる枕のほど、ありがたきまで見ゆれば、年ごろ何ごとを飽かぬことありて思ひつらむと、あやしきまでうちまもられたまふ。(同九)

〔12〕御髪のただうちやられたまへるほど、こちたくけうらにて、露ばかり乱れたるけしきもなう、つやつやとうつくしげなるさまぞ限りなき。(御法六・一一六)

〔13〕御髪はいとこちたうもあらぬほどにうちやられたる、枕より落ちたる際の、つやつやとめでたうをかしげなるも、いかになりたまひなむとするぞと、あるべきものにもあらざめりと見ることが、惜しきことたぐひなし。こくら久しくなやみて、ひきもつくろはぬけはひの、心とけずはづかしげに、限りなうもてなしさまよふ人にも多うまさりて：(総角七・一〇七七八)

いずれも無防備に男性の視線に晒され、うちやられた髪が至上の美しさを放っている場面である。〔10〕は出産という点で〔11〕①と共通するが、最愛の女性との死別という枠組み・男性の哀惜ぶりからいえば〔12〕〔13〕の方がより近いだろう。紫の上は出家を望むが、かなえられずに亡くなった。せめて死後においては落飾させてやるべきか否か―紫の上の遺骸を前に源氏と夕霧の心はせめぎ合う。宇治

の大君は己の身体を否定し、薫に姿を見られるのを拒んでいたが、死に際しては身構えるのを捨てざるを得なかった。男性の視線に構わなくなった時、彼女達はこの上なく美しい。もはや繕われなくなった髪が男性の心をかき乱し、死を迎えた女性への執着が増幅させられている。¹⁶⁾

「10」も「源氏」に表面的にはよく似てはいるが、内実は全く逆である。紫の上や宇治の大君は亡くなったのだから、源氏・薫の執着とはもう無縁であった。葵の上にしても、源氏の心に美しい面影を残してこの世を去っていく。「寢覚」の女君の場合、死ぬことはないし、姫君の出産により二人の絆は強まってしまふ。その上、衣の交換によって永遠の契りを約束もさせられており（一二三〇）、「10」は男君の欲望を煽り、彼に束縛されていく状況を描いた場面に仕立てられているのである。女君を失う不安に怯えた男君の恋情は極限にまで高められ、それを受けていかなければならない女君の苦悩は果てしない。

男君に源氏や夕霧、薫が、女君には「源氏」の女性達の影が重ねられ、女君が亡くなってしまふかのような雰囲気は演出されてはいるが、展開は「源氏」とまるで違う。「源氏」を思い浮かべつつ読み進めた読者の、二人の死別の予感に裏切られてしまふのである。「源氏」は愛執に疲れた紫の上・宇治の大君がこの世から離れていく様を描いた。それに対して「寢覚」はかぐや姫の女君が地上に墮

ち、俗世で女の業苦にまみれていく序章になっている。この違いに、「源氏」の主題を継承しつつも深化させようとする「寢覚」の意気込みが顕れているのではないか。まるで物語は、そう簡単に女君は愛執から解放されない、これから紫の上や宇治の大君以上に苦渋に満ちた生を歩んでいくのだと告げているかのようである。「源氏」引用によって女君を一旦死の淵にまで追いやり、またこの世に引き戻すという展開に、「源氏」以上に深刻な女性の生き方を追求していくこととする「寢覚」の姿勢が見えてくるように思われるのである。

四、広沢における女君の髪

「源氏」の引用とは直接関係ないが、髪が物語の展開に関わっている場面をとりあげておきたい。

「14」かかれる御髪は、塵ちりのまよひなく、つやつやと隙なくかかりて、いといたく面瘦せたまひつるかたちの、言ひ知らず薫りをかしげなる、にほひこほれぬばかりらうたげにて、へ中略へ「さばかり久しかりつる御心地に、さらに衰へたまはぬかな。御髪も落ちぬらむと思ひつるを、裾も細らざめり」

（巻一・一九八）

広沢に移り父入道と対面した時、女君の髪は父に哀憐の情を催させる。会つたら色々意見をしようと心づもりをしていた入道だが、瘦せてしまった娘を見た途端、あまりのいたわしさに胸を痛めるので

あつた。おそらく父との対面のため梳られ整えられたのであろう、女君の髪は美しく、「4」①宇治の中の君の髪を思わせる。とりわけ可愛がり将来を囑望していた娘を、このまま朽ち果てさせてしまふ無念さ——本来ならばしかるべき夫に見せるべきであるが故に、父入道は娘の髪を惜しむように点検する。¹³

大君の味方についていた兄左衛門督も、女君に再会したとき、

「15」御髪は落ちさせたまはずやある」と、掻き出でたれば、六尺ばかりなる末つき、扇を広げたるやうなり。「こよなうこそ長^{左衛門}うならせたまひにけれ。あはれに、あたらしき御様なりや。見たてまつれば、なかなか心づくしにおほえける」とて……

(卷二・二二〇—二)

と怒りを解き、髪を愛おしみつつ「掻き出で」ている。ずっと「いたはり」「つくろはれ」なかつた女君の髪が、やつといたわられ「掻き出で」られたのである。心細かつた女君は、兄に許された喜びを噛みしめるのであつた。

当時の女性にとつて髪は自分一人で手入れできないものであり、誰かに世話をしてもらわなければならなかつた。髪を繕われるというのは「世話をする人間に、もつとも弱い背を向け、髪の手入れを委ねる」のだから、自分が「相手の庇護下にある存在であることを身体的にあらわすしぐさ」である。¹⁴「源氏」では例えば少女時代の紫の上は北山の尼君に（若紫一・一九一）、落葉宮は一条御息所に

(夕霧六・七五)、八宮亡き後、宇治の中の君は大君に（総角七・五七）髪を繕われていた。「寝覚」においても、女君は「5」①で庇護者たる対の君に髪の手入れをされている。「14」「15」も、これらの例に連なるものとしてとらえてよいのではないか。髪を心配され、「掻き出で」られるというのは、寄る辺のなかつた女君がやつと父・兄に許され、守られる立場に置かれたことを象徴していよう。女君の髪は完璧な美しさが強調されるとともに、父・兄の心を和らげるよう作用している。

このような父入道・左衛門督との関係の提示が中間欠巻部分、左衛門督の仲介による老閨白との結婚という展開へと繋がっているのではないか。現存部分には「やがて親兄弟のもてなしなれば、いかがはせむ」(卷三・二二三)。「^{女君}命も絶えつばかり思ひ入りながら、親はらからにえさらずもてなされ、従ひたる」(卷四・三五六)と、老閨白の結婚は父・兄によつて強引にとりはからわれたものだったという男君の述懐があり、「無名草子」からも、欠巻部分に左衛門督が女君に老閨白への文の返事を書くよう強引に迫る場面があつたのが判る。¹⁵その際の女君の胸中は推察するしかないが、女君は庇護者の父や左衛門督に従わざるをえなかつたのであろう。女君の性は父・兄に支配されているのである。

結

以上のようにみると、「寢覚」における「源氏」引用は単に「源氏」の女性達の美しさに女君をなぞらわせる効果だけではなさそうである。むしろ「源氏」の表現を踏み台に、新たな表現を織り上げていく姿勢がうかがえる。髪に関する表現の引用によって、その「源氏」の場面場面で各女性達が髪を介して対峙した生の状況までも持ち込み、そしてそれを反転させるかたちで「寢覚」の女君の抱える問題を照射していよう。この点では「寢覚」の髪の表現は、単調ではなく、場面展開に有機的に関わっているものであるといえるのではないか。ただし、やはり冒頭にあげた三田村雅子氏の指摘通り、量・長さ・質の素晴らしさを繰り返すだけなのは間違いなく、表現自体は典型的である。確かに表現には目新しさが無い。

宇治十帖の要素を持ち込み、宇治十帖の世界にぎりぎりまで添い、読者が宇治十帖の「あの場面」を思い起こすように誘いこんだところで、決定的な違いを打ち出し、「寢覚」の独自性を示している。果たして作者がどれだけ自覚的に「源氏」引用を物語の手法として利用しようとしたのか、そしてそれがどれだけ有効であるのかはまだはつきりしない。これらを明らかにしていくには「寢覚」を内側から検討するだけではなく、外側からの検討として物語創作・享受の場のありかたとの連関を問題にしていかなければなるまい。

「源氏」引用とは何なのか、文学史的な視点からとらえていく必要もあろう。以上のような事も念頭に置きつつ、引き続き、源泉としての「源氏」の深さ、並びに「寢覚」の独創性について考察していきたい。

【注】

(1) 「夜の寢覚」本文の引用は小学館「新編日本古典文学大集」(鈴木一雄校注・訳)によったが、一部表記を私に改めた。なお、末尾の(一)内に巻・頁数を付記し、注記・符号・傍線部等を私に付した。

(2) 「源氏物語」本文の引用は「新潮日本古典集成」(石田穰二・清水好子校注)によったが、一部表記を私に改めた。末尾の(一)内に巻・頁数を付記し、注記・符号・傍線部等を私に付した。

(3) 三田村雅子氏「黒髪の源氏物語」(「源氏研究」第1号へ平8。翰林書房)。
また、前期物語の髪の言説について考察したものに吉井美弥子氏「源氏物語の「髪」へのまなざし」(古代文学論叢第13輯「源氏物語と源氏以前研究と資料」へ平6。武蔵野書院)がある。

(4) 「源氏」の髪に関する論としては(3)に上げた二つの他、河添房江氏「髪のエロテシズム」(性と文化の源氏物語へ平10。筑摩書房)がある。

(5) 拙稿「夜の寢覚」の「簪」―「源氏物語」引用の方法の一断面―(「古代中世国文学」第16号。平12・12)。

(6) 前掲(4)論文。

(7) 井上真弓氏「性と家族、家族を越えて」(「岩波講座 日本文学史第3巻 一・二世紀の文学」へ平8。岩波書店)も大君の衣装・髪の様子の描写および「限りなき人の御さま」との評価は「女君はそれを越える美しさであることをいわんがため」とされる。

(8) この箇所の浮舟物語との表現の重なりについては池田和臣氏「源氏物語の水脈―浮舟物語と夜の寝覚―」(『国語と国文学』昭59・11)が指摘されている。

(9) 前掲(3)三田村論文では、出家前の浮舟の髪が母・横川の妹尼君からの幸せな結婚への期待に絡め取られていたことをふまえた上で、この場面を「髪」というかたちで蔽いかぶさってくる期待の重みにあえぎ続けた浮舟がようやくたどりついた安らぎと解放を、象徴的に表す風景」とされている。

(10) 前掲(8)論文。

(11) 永井和子氏「寝覚物語―かくや姫と中の君と―」(『続寝覚物語の研究』平2 笠間書院)。

(12) 小学館「新編日本古典文学全集」頭注には「常の事。年の初めの常ではあるが、「常のごと」と読めば、例年同様に、の意、「常の言」と読めば、平凡な言い方だが、の意」とある。

(13) 「新潮日本古典集成」は「骸」の字をあてるが、ここは蟬の抜け殻の意なので、「殻」の字の方が適当であろう。

(14) 前掲(8)論文。

(15) 井上眞弓氏は前掲(7)論文で「寝覚」の髪や身体表現を検討され、女君の側からは妊娠の苦悩・良心の呵責が語られながらも、男性達からは女君の妊娠による面瘦せの美が発見・賞賛されていくという「アイロニカルな構図」を見てとられた。三田村氏も「寝覚物語の(我)―思いやりの視線について―」(『物語研究』第一集物語研究会編(昭63 新時代社)で女君と男君の関係に危険が生じる毎に女君を妊娠させ、両者の関係を再び結んでいくかたを指摘され、女君の「肉体と同一歩調をとれない、肉体から疎外された」意識」が逆に際立つ結果になっている」と述べられている。

(16) 前掲(3)三田村論文はこれらの場面をとりあげ、「源氏」は「うちやられた」髪が男性達の欲望のまなざしから離れ、無防備であるが故にその女性本来の美を発しているさまを描いていると述べられている。

(17) 小学館「新編日本古典文学全集」の本文では「散りのまよひなく」とするが、ここは「少しも、微塵も」という意の「塵」とする方が適当であろう。

(18) 前掲(7)井上論文では「なせ娘を許容するのに髪を愛でる表現なのであるうか。父が娘のセクシュアリテを握っている様子がかわれる。いわば、ゆるしセクシュアリテとが相同しているといえよう」と指摘されている。

(19) 前掲(3)三田村論文。他にも原岡文子氏「紫の上の登場―少女の身体を担って―」(『日本文学』平6・6)は、髪を梳る／梳られるの関係に支配関係を看取されている。

(20) 小学館「新編日本古典文学全集」『松浦宮物語 無名草子』(樋口芳麻呂・久保木哲夫校注・訳 一三二頁)。

【附記】

本稿は、平成13年度に広島大学国語国文学会 春季研究会における口頭発表を基にしたものである。竹村信治先生・西本登子先生をはじめ多くの先生方から貴重なご指導・助言を賜った。深く感謝申し上げます。

―あかさ・しょうこ、本学大学院博士課程後期在学―